



107号
2005/10/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

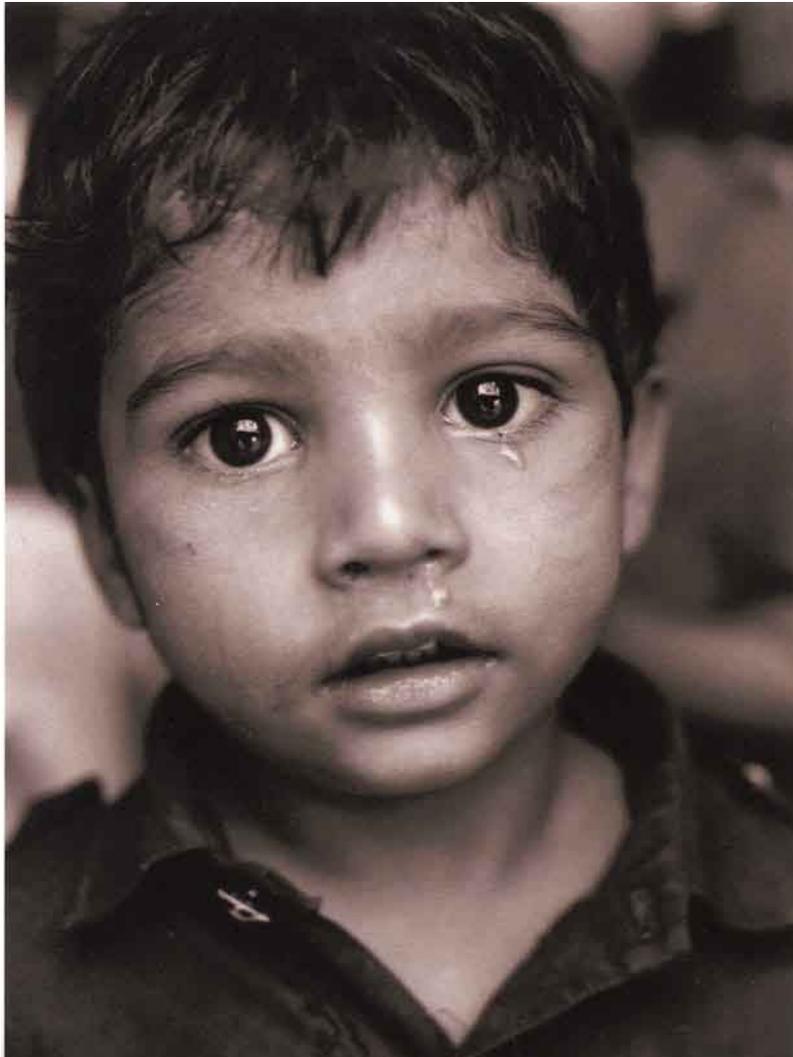
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール: wanli@m2.ocv.ne.jp

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



◆撮影地:インド/デリー ◆撮影:大久保聡 ◆写真展「世界を知ろう! 我々は皆、地球人」では、大久保聡撮影の写真が多数展示されます

【お出掛けください】

第8回 町田発国際ボランティア祭

2005 夢広場

<http://www.yumehiroba.jp>

2005年11月6日(日) 10:00~16:00

於: 町の駅「ぽっぽ町田」 参加: 無料

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分
町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り(地図最終ページ)

夢広場祭写真展

「世界を知ろう! —我々は皆、地球人—」

2005年11月1日~5日 11:00~18:00

最終日: 16:00

於: 町田市立街角ギャラリー

町田市原町田 4-6-8

主催: 2005 夢広場実行委員会 / 共催: 財団法人町田市文化・国際交流財団
問合せ: 042-722-4260 2005 夢広場実行委員会・町田国際交流センター

町田発国際ボランティア祭「夢広場」は、国内国外を問わず国際支援と友好に向けて活動を続けている、国際ボランティア団体の交流の場です。1998年以來毎年秋に開催され、今年は8回目を迎えました。「夢広場」祭の当日は、町田市内外の30を越す団体が集い、それぞれの団体が支援・交流している国の民芸品や料理材料の店や、飲食の模擬店を出展。一方、仮設ステージでは華やかな衣装の民族舞踊や民族音楽の演奏などが上演されるなど、お出掛け頂ければ、きっと世界の国々が身近に感じられる楽しい一日になるでしょう。

「わんりい」の会は、毎年、中国雲南省に住む少数民族・白族の手絞り・本藍染によるブラウスやバッグ、Tシャツなどを紹介し、販売しています。日本でも昔は、本藍による染めは一般的で、日々の生活に密着していましたが、手間ひまが掛かる為、段々に廃れ、今では趣味的な高価なものになっています。雲南の藍染は値段もリーズナブルで、洗えば洗うほど藍の色がさえ、長く愛用できます。お立ち寄りをお待ちしています。

尚今年も、祭会場近くの、町田市立街角ギャラリーで、町田発国際ボランティア祭「夢広場」の関連事業として、上記写真展「世界を知ろう! -我々は皆、地球人」が開かれます。プロとして活躍の、大久保聡氏が世東西アジアで撮影された生活臭溢れる作品及び、夢広場参加団体より自由参加で出品の各国々の写真が展示されます。近くにお出掛けのついでに是非お立ち寄り頂き、写真展の趣旨に共感いただければと存じます。(田井)

「わんりい」107号の主な目次

中国紹介②(中国民俗—改革解放後の変化3)	2
黄土高原来信第二部「陝北女娃娃」序文	4
東チベット遊牧民の部落にて	6
ピースボート105日間の旅Ⅶ「大西洋」	8
中国を読む②【中島敦「弟子」】	9
媛媛来信⑩「重陽節」	10
北京からこんにちわ③	10
ラオスの山からだよりⅣ「一人ぼっちのマイ」	11
アフリカとの出会いⅣ「歌と踊りと」	12
「あなたの知らないアフリカ」1(講演会より)	13
「中国語で歌おう」10月の案内	15
松本杏花さんの俳句	15
「わんりい」掲示板	16

◆歯ブラシ

旧：忘れられない思い出が2つある。初めて中国に行ったとき、まだ外国人はそう多くなかったらしい。外国人があまり泊まらないホテルに変更したとき、設備についてはあまり期待していなかった。トイレトーパーや石鹸やタオルなどはあったものの、特に印象は残っていない。しかし歯ブラシだけは記憶にある。そのホテルの歯ブラシは、不透明のケースに入っていて、中国語でよくある「道中ご無事で」と書いてあった。確か毎日替えてくれなかったと思う。ケースつきなので結構気に入って日本に持ち帰った。その後国内旅行などに持って行った記憶がある。歯ブラシ自体は使えなくなっても、そのケースだけは捨てなかった。その他のホテルの歯ブラシがすべて紙ケースには入っているありきたりなものだっただけに印象が残ったらしい。その後、ケースつきの歯ブラシには出会ったことはない。

もう一つは95年の年末、北京に泊まったときのこと。夕食をたらふく食べた。肉・魚・野菜など盛りだくさんだった。寝る前に歯を磨くのだが、そのときにホテルの歯ブラシを使った。食後、魚料理は小骨が多く歯にいろいろなものが挟まっている感があったので、いつもにまして強く磨いていた。すると磨いている間に既に小骨が落ちてくるような気がする。ゆずぐと小骨がたくさん出てきた。歯にそんなに小骨をいれたまま寝るまでの時間をすごしたとは思えなかったので、もっとよく見てみた。なんとその小骨だと思ったもののほとんどは、歯ブラシのブラシ

だった。本体への接着が弱いのだろう、ちょっと歯をこすただけで取れてしまうのだった。どうりで小骨が多いわけだ。おかしくて笑ってしまったが、ひどい歯ブラシもあったものだ。

新：21世紀に入ってからは、田舎でも宿のアメニティグッズの質が向上している。歯ブラシも柄がすぐ曲がってしまうものや、小骨と間違えるほど取れてしまうブラシ、ブラシ部がすぐ曲がってしまうものなどが少なくなった。それにつれて歯みがき粉も向上した。固くて延びない、量が少ない、開けるとすぐもれてしまう、おいしくないものが減り、当然使い心地もよくなった。最近ランクの高いホテルで、2セットずつある歯ブラシの色が違うものを用意するところもある。二人で泊まったときにどちらがどちらとわからなくなるようなことはないし、好みの色もあるかもしれない。そういう意味でもよくなったと思う。また、本体と歯磨き粉を入れる外装も通常の箱タイプに変化が出てきている。ダンボールのように折れ曲がった部分を外装にしてみたり、箱ではなくお菓子のよう外装になっていたり、結構面白い。今のところ、高級すぎるホテルで歯ブラシなしという経験はしたことがない。さすがにそんな超高級なところには泊まることもないだろう。

◆石鹸

旧：歯ブラシとくれば、次は石鹸だろう。こちらも昔はすごかった。量が少なくて、まず泡立たない。これでは体を洗った気にならない。香りもなく泡立たない石鹸は最悪だ。ごしごしこするだけで体は乾燥するし疲れるし汗は落ちない気がする。パラフィン紙にくるまれた小さな石鹸は用をなさず、いつも日本から持参していた。

新：その石鹸も21世紀以降は特にすごい。量も形もさまざまになってきたが、全体的には量が増えた。また香りも泡立ち度もよくなり、日本から持っていく必要はなくなった。包装も凝ったものになりお決まりのぺらぺらな箱タイプはもう見なくなった。大抵は円盤型で洗面台と浴槽に各1個置かれていることが多い。中には固体の石鹸をやめてシャンプー・リンス・ボディソープタイプになっているところも出てきた。もう楽しみはなくなったが、このほうが確かに使いやすく便利ではある。資源としても



火鍋：貴州省の田舎の食堂で。子供の腰掛けのような小さな椅子で食べることが多い。テーブルの上にあるのが、ぺらぺらのコップ。うまく持たないとこぼれたりする。

無駄が少ないかもしれない。

◆筆記具

旧：日本人での標準があるかどうかは知らないが、公式な書類記入の場合黒のボールペンやペンで、となっている場合が多いと思う。ところが中国では青が主流のようだ。ホテルに置いてあるボールペンもそうだし、街中で領収書をもろうときもいつも青だ。しかも、あまりよく書け

なかったりする。旅行中は何かと必要かつ便利なため黒のボールペンを身近においておくが、それは例えば両替時のサインをしようと思えばボールペンで書こうとすると出なかったりするための用意でもある。どうも黒が当たり前の世界に育ってしまうと、青に違和感を感じてしまう。

新：製造の品質向上により書けない、書きにくいボールペンは減った。デパートなどには日本製の筆記具も結構出ている。ボールペンだけではなくペンの使用も浸透してきた。また青一辺倒だったボールペン界にも黒色のものが登場した。領収書関係は複写式が多いので、写りは青だから見栄え的には変わらなかったりする。

それにしても、万年筆か青ボールペンしかなかった時代に比べれば、シャーペンやペンなどいろいろ出てきたものだ。でも鉛筆と消しゴムを使う人はあまり見かけない。子供を接する機会がほとんどないからだろうか。

◆コップ

旧：外食するときに、日本のように「当たり前の水」は出ない。そのかわりに高級レストランではお茶が出ることが多い。その際のコップ(湯のみ)は陶磁器製が多い。ビールなどの場合は、ガラスコップのことが多い。しかし日本と違うのは、熱湯でもガラスコップにそのまま注ぐこ



高級レストランでの食事風景。テーブルクロスは布で、ペラペラコップはなくビールはガラスのコップに注いでいる。

とだ。茶葉をいれてガラスコップにお湯を注いでしばらくたてばお茶が飲める。最初は割れないかと心配していたが、中国のガラスは丈夫なのかお湯で割れたのは見たことがない。陶磁器の湯のみの場合は茶漉しされたものが注がれるので飲みにくくはないが、ガラスの場合は茶葉をよけながら飲むので、多少技術がいる。ビールもお茶もガラスコップを使うやり方に驚いたが、そのうち慣れた。

新：最近のレストランでのビールを飲むときのカップは、プラスチック製が多い。しかも笑えることにプラスチックがあまりに薄くてペラペラなので、しっかりつかむと液体がこぼれてしまう。そんなカップに時にはお茶もいれる。茶葉つき茶葉なしに関わらず、お湯を注ぐ。熱いから真中をもてないので上端をもつことになる。使い捨て時代とはいえ、このペラペラカップにはかなりみんな参っている。持ちにくい飲みにくい。もちろん紙コップのときもあるが、ごく少数で大体どこへいってもこのペラペラカップだ。全国统一規格なのかもしれないが、資源の無駄使いではないのだろうか。

ついでにいうと、レストランでは以前はテーブル単位で布のクロスを敷いていて、食べ散らかしても布を毎度交換していた。しかし最近布交換や洗濯が面倒なのか、



酸湯魚：貴州苗族の名物料理。有名店で食べたので、皿はきちんとしている。コップはペラペラだが、あとは問題なかった。テーブルクロスはなし。

布クロスの上にこれまたペラペラのビニールを敷き、毎食後このビニールを交換するようになったところが多い。このビニールはペラペラなので、風が吹くとすぐ舞い上がるし暑い時期は腕などと接触するのも気持ち悪い。回転テーブルでうっかり皿とひっかかって水分をこぼしたとしても、吸うものがないから結構服がぬれたりもする。片付けは楽かもしれないが、客としてはまだ慣れない。

(写真は本文とは直接関係ありません)

周路著「陕北女娃」翻訳に当たって

田井光枝



‘わんりい’が活動を始めた当初より関わりの深い、安徽省合肥市の木版画家・周路氏は、中国陝西省の奥地に広がる黄土高原地帯に魅せられ、芸術的な靈感を得て木版画の制作を続けてきました。遂には、2年間現地である延川県の文化局副局長として住むに至り、その間、黄土高原に住む人々や生活を「黄土高原来信」（黄土高原からの手紙）として‘わんりい’に寄せていただきました。それらの文章は、2004年4月「陕北紀実」として纏められ出版されたことは既に周知のことですが、今年5月、新たに、貧しさの犠牲になりがちな黄土高原の女の子28名を取材し「陕北女娃」として出版され、中国中央宣伝部と中国新聞社総合出版総局の推薦図書100冊の内の一冊に選ばれるなど反響を呼んでいます。

‘わんりい’の会は、周路氏の案内で、外国人の入域制限

開放の間もない頃、現地に2度訪れ、昨年度も「陕北紀実」出版記念として3度目の当地訪問を計画しました。生憎の天候不順で昨年度は実施にいたりませんでした。尚、この地に関心を寄せているメンバーも多くおります。

会の名称である‘わんりい’とはどんな意味ですかとよく訊かれますが、この名は‘万里の長城’の万里の中国読みです。周路氏と訪れた黄土高原のど真ん中に、まさに崩れ去ろうとしている万里の頂上からの眺めにヒントを得てつけました。

長城は万里につながり、そして、長城からの眺めは、国や民族を超えた文化と文明の流れを感じさせるものです。未だきな臭い民族闘争が絶えない地球上ですが、この崩れ落ちる寸前の万里の長城から、茫漠と続くはらかな眺めを見れば、人はもっと謙虚になり、争うことの無意味さを感じられるのではないかと、そんな気持ちも込められています。

そんなこんなで、‘わんりい’と関わり深い、地球上の究極の僻地・黄土高原です。周路氏の情感溢れる名文を、中国語の十分な力もなく、日本語としてもつたない文に翻訳するのは気が引けることですが、「陕北女娃」の訳文を、黄土高原来信第二部として‘わんりい’に掲載してみたいと存じます。

一億五千年前のジュラ紀、或いはそれよりも更に古い大昔、中国北西部の崑崙山から空を蔽うようにして吹き寄せて来た黄塵は、ずうとずうと今日までも吹き寄せられ続け、蓄積され現在の西北黄土高原の地形が作り上げられました。黄土高原の黄土層は最も厚いところで500m余りにもなり、世界でも唯一無二のものとも言われています。この本の中で語られる陕北黄土高原はその(中国)西北黄土高原のごく一部分に当たります。

水は生命の源です。乾燥した大地は水を得て潤い、地力を蓄え、ひっそりと静まり返った不毛の荒野は水を得て生命が満ちるようになります。と同時に、黄土の大地は雨水に洗われ、現地で‘毛沟’(máo gōu 毛は小さく、細いの意)と俗称される、数え切れない溝をも出現させます。黄土高原を縦横無尽に刻む‘毛沟’は、一億年の風雨に浸食されて、更に深くえぐられ、引き伸ばされ、黄土高原をばらばらに分割して行きました。大きな毛沟’では今は河となり、河の両岸は‘川’(chuān)と呼ばれる平地になり、人々の生活に適したよい場所にもなっています。侵食されずに、高く小山のように盛り上がったところは‘峁’(mǎo)と呼ばれ、‘峁’がもっと大きくなれば‘梁’(liáng)となり、更に広がりがあるところは‘塬’(yuán)と呼ぶようになります。そして川と塬梁の間にあるまるで刀で削り取ったようなごつごつとした崖面を‘沟壑’(gōuhè)と呼んでいます。有る人が黄土高原をこんな風に描写しました。「梁峁起伏、沟壑纵横、无雨干旱满天尘土、逢雨遭殃遍地泥浆」(梁峁が打ち続き、沟壑が縦横に走り、雨が降らない日照りの大地は黄砂が降り注ぎ、雨が降ればどこもかしこも泥水だらけ)。

この地に雨水の侵食でできた最も深く、最も長い‘溝’があり、現地の人の呼び名はいろいろです。或る人‘伏羲河’(fú yì hé)と呼び、又、或る人‘苏亚河’(sū yà hé)と呼び、‘城畔河’(chéng



黄土高原の典型的な地形

pàn hé)と呼ぶ人もあります。人々はその流れが上流から流れて来るとは知っていても、それがどのあたりからなのかははっきりとは知りませんし、下流に向かって流れて行くことは知っていますが、どこに向かって流れてゆくのかは知りません。人々は先祖代々、年々月々、慈潤という恵みを受けながらずうとその流れと共に生活して来ました。しかし、各地の‘毛沟’や‘小溪’が集めてくる泥水をどんどん受け入れた結果、時には怒りを発することもあるので用心しなければなりません。‘毛沟’は常に大量の黄砂を流し込んだ泥水を誰はばかることなく‘大沟’に流し込み、‘大沟’の水を黄色く染め、後世の人々は彼を‘黄河’という名で呼ぶようになりました。

歳月は過ぎ去り、河は更に深くなりました。黄河の両側は峡谷のように、切り立つ厳しい姿になりました。河は休むことなく流れ、溪谷の上部をまだらな緑色に染め、まばらに木が生えるようになりました。東方に日が昇ればゆらゆらと炊煙が立ちのぼり、西の山に日が落ちればゆったりと歩く人影が見えるよう

になりました。人類がいつ頃から黄土と連れ合いになり、黄河に相寄り、世代世代、収穫を重ね、衰えることなく生き続けてきたのでしょうか？

‘山’で、緑の斑点のように樹木が生えている辺りは、人々が生活しているところでそこには村があります。村には名前を付けなければならず、例えば“一斗谷”村のように、生活と密接に関わる名前が選ばれます。家に一斗谷(谷は穀類の総称)があれば、生活に愁いはありません。この一斗谷村の中央に一本の古いエンジュの老木があります。風霜に打たれ、酷暑に耐えた長い歳月を刻み込み、毎朝誰よりも早く日の出を迎え、一番最後に落日を見送っています。この樹は村人が生まれ落ち、成長し、仕事をし、老いてこの世を去るまでの波乱の一生見えています。生きとし生けるもの、老人も、老婆も、若者も、娘や子どもたちも老エンジュの許で集っています。子どもたちの中には男の子もいれば女の子もいます。男の子は家の支えであり、女の子もまた父母の掌中の玉です。「子どもは頭の上に3升の雑穀を乗せている」と言われていますが、それは子どもは食料を持参して生まれ出るのであり、この世に生まれたからには生きる権利を持っているということです。ですからこの地の人はそれぞれの子どもは皆先祖の生まれ代わりと見なし大事に育てます。たとえその子が知恵遅れの子どもであっても食事を与え育てなければなりません。

しかしながら、この痩せ土の村に生れ落ちるということは‘腹いっぱい食べる’という苦渋に満ちた重荷を肩にすることでもあるのです。体の構造から男の子は力ある労働力ですし、先祖を祭り続ける大切な存在です。確かに女の子も又子々孫々と世代を繋ぐに欠かせない存在であり、父母への親孝行の心は勝っています。しかし、いずれにせよ人は老いて行くものであり、年老いれば身近に息子がどうしても必要です。さもなくば老人たちの生活は困難なものになるでしょう。遠くの村に嫁した娘は、遠くの水が渴きを癒してはくれないようなものです。国の政府からどんな老人福祉も生活の保障も当てにすることができない人々の現在の最大の問題といえるでしょう。「子どもを育て老後に備える」というのは人々の固い信念であり、自分自身を守る方法です。ですから愛情の天秤は男の子の方に傾きがちで、ひとたび家が窮迫すれば、真っ先に学校を辞めるのは必ず女の子です。これが現実なのです。

20年前初めて私が陝北の地に足を踏み入れたとき、新鮮な、何か好奇心をそそられる感じを受けました、が、一方心とがめるような感情も味わいました。道端の壊れた窑洞(yáodòng :山の斜面などに掘られた横穴式住居)の傍らに立った、色白のおとなしい女の子が決まり悪そうに私を見ていました。聞き分けよく身体を私に向けて写真を撮らせてくれましたが、私は写真を撮り終わると、その子のもの問いたげな気持ちや、何か願うような気持ちを背に立ち去ってしまいました。その後、私はこの地を10回以上訪れ、又2年の歳月をこの地で過ごし、同様な何か求めているような眼差しに何回も出会いました…。

瘦せた耕土と生活の苦難は形と陰のような関係で切り離せません。しかし、この地の子どもたちから天真爛漫で純朴な天性を

奪い取るものではありません。陽光の下の子もたちの顔には貧困がもたらす怨みや卑下の表情を見ることはなく、彼らの元気で純真な笑い顔はこの世界に永遠に希望をもたらすものです。

このような黄土高原ですが、経済と文化の深刻な遅れという厳しい現実があります。粗末の教室の中は薄暗い、風通しは悪い、先生は足りない、子どもたちが課外で読む本や文字を書く紙は不足、勉学の補助施設は何もない…、彼らが受ける教育の質も量も総体的にこの地以外の同年齢子どもたちに比べて1年乃至2年の遅れがあります。進学試験に失敗すれば、故里に戻り、彼らの父母が歩んだのと同じように、畑に出て作物を育て、先祖代々の血筋を絶やさないようにし、郷土を守り、そして最後は静かに黄土の土となって戻ってゆく…。

この本の何十人かの陝北の女の子は皆さんに彼女たちの真実の心の中の世界、生活、勉学の環境、彼女たちの周りで起こった事柄、そして彼女たちの夢を告げています。 (田井訳)



自分が書かれている本に見入る女の子

周路氏がこの夏、出版されたばかりの「陝北女娃娃」を携えて黄土高原の村々を訪れ、28人の子どもたちに手渡した様子が、合肥夕刊の写真ニュース欄に大きく報道されました。

周路氏はその新聞記事の中で、「女の子はいずれ人の母となる。女の子がきちんと教育されないことは行く末大きな禍根を招くもとなる。本の出版は当然ながら、自分の栄誉のためでもお金を得るためでもなく、自分のカメラと文章を通してそのことを訴えたかった」と述べていますが、この本の出版社より、10万元(約150万円)の寄付が寄せられ、陝北黄土高原の村の一つに小学校が新たに建設されることになりました。周路氏の希望として、更にこの女の子たちを北京につれて外の世界を見せてやりたい、取材した足の悪い女の子の治療費、学校に行くのを止めざるを得なかった少女たちの学費の応援などを求めているとのこと。

昨秋、NPO 法人ゲーサンメド（理事長：烏里烏沙氏）は、中国四川省の奥地・理塘県曲登郷に本格的なチベット建築による小学校を建設しました。その第3期プロジェクトの監督として派遣されていた鈴木晋作さんが9月中旬帰国、現地での様子を‘わりい’に寄せてくださいました。鈴木晋作さんには、現地に赴くに当たって‘わりい’の中国語講座のメンバーが翻訳した絵本を持って行っていただきました

■ 曲登郷ゲーサンメド小学校第3期プロジェクト

今年の8月初旬から約1ヶ月間、中国四川省カンゼチベット族自治州理塘県の中心部理塘と遊牧集落の曲登郷に滞在しておりました。現地に到着した頃には、年最大の行事「国際競馬祭」も終わり、早速、職人・材料の手配・確認のため作業に入りました。街で再会した友人からは、競馬祭を見逃すとは、なんと惜しいことをするのだと言われましたが、競馬祭の間中は、冬が厳しく閉ざされる理塘の人々にとって「お正月」のようなもので、プロジェクトは進みません。

今回の目的は、昨年度第2期建設を終え本格的に開学した小学校の教師・学生宿舍と食堂の内装工事、グラウンドの整備をすることでした。前年度、厳しい状況の下、共に小学校建設を経験した地元政府幹部と小学校教員の主導で、プロジェクトは円滑に進み、予定通りプロジェクトは全うされました。これによって曲登郷の中でも更に遠隔地の学生を受け入れることがで

きるようになりました。通いの子どもにとっては、グラウンドで思いっきり遊べるのが、何よりの喜びだったようです。そこで…!?

■ 美術の授業をグラウンドで「写生大会」

ぼくの隠された目的は、思いっきり子ども達と遊ぶ!ということでした。実際には、そんな時間はありませんが、ある晴天の日の午後、美術の授業を教室の外に出て、グラウンドで行うように先生達に提案しました。最も心地良い時季を利用して、新しいグラウンドで大きな絵を描いてみよう! 9月になると晴れの日が続くようになるのです。それは同時に、長い冬の訪れの始まりでもあります。

4,5人一組の班に分け、理塘で手に入れたクレヨンと80cm×100cm程度の大きな紙をグラウンドの好きなところに広げました。自分達の村や学校の生活などを好きなように描きました。

点描画のような細かい絵を描く子、恥ずかしがってなかなか筆が進まない子、いきなりクレヨンで大胆に大きく描く子、画面を割り振ってちゃんと全体を設計し他の子に指示する子、日差しが強いにもかかわらずずっと描き続けている子、すぐに止めて人の絵ばかり見に行く子。

一枚の紙にそれぞれの個性が詰め込まれ、ひとしきり描き終わったところで、描いたもの一つ一つにチベット語もしくは漢語で名前を書きました。そして最後に同じ班の隣の子の顔を描き、全員の顔と名前を記入しました。とても愉快的な午後の課外授業でした。

■ 学校生活あれこれ

9月15日現在50余名の学生が来ています。昨年は、初めて見るたくさんの他の子どもとの集団生活に動揺し(多数の子ども同士で遊ぶことの慣れていない遊牧民の子も多い)、泣き止まなかった子も一年経って、音楽の時間にみんなの前で堂々とチベット民謡を歌っています。

子どもたちは、朝も昼休み後も授業前早くから、学校に来て自習し、遊び、放課後も先生を捕まえて質問しています。そして付近の人も参観に訪れます。今では、お寺に続く曲登郷の中心地となっていることに気が付きます。

新学期が始まり数日経って、曲登郷から理塘に戻る道程で、見覚えのある少年に会いました。3年生のその子に「明日、学校に来いよ!」と言うと、なんとも照れくさそうでした。父親も近い内に必ず通わせると言います。その後も気にかかっていましたが、3,4日後に学校に現れました。遊牧生活では子どもにも、大事な仕事があり、家族の中での役割を一人一人が持っています。そのことも重要ですが、皆と絵を描いたり、勉強する時の楽しみ・



グラウンドで写生大会 9月8日



新学生宿舍 (曲登小)

集中力は、遊牧生活の中では、得られるものではないでしょう。その子は先生も認めるほど絵が得意なのです。

■ 絵本を巡って

今回は、曲登郷ゲーサンメド小学校の子ども達に、お土産がありました。日本でわんりいの皆様と岩田温子様の気持ちのこもった絵本12冊を図書室に寄贈させて頂きました。新学期開始以前は、理塘の街で子ども達と遊ぶため、カバンの中に忍ばせていました。遊びの道具・言葉として用いるのと、その反応を見たかったからです。そして、意外にも理塘では、大人に好評でした。

帰国間際に四川省の省都、成都の新華書店には、子ども向けの図鑑などは各種揃ってはいるが、「絵本」となると日本ほどの充実振りは見られませんでした(沿海部の都市は、充実しているかもしれないが)。

一言で「良い絵本」と言うのは難しいのですが、良い絵本は良いお手本として、語学や美術の時間にも使えるのです。チベット語担当のゲーサンラモ先生は、授業でも使いたいと言うので、必要があればチベット語を書き込んで、読み聞かせたり、どんどん使ってもらうようにお願いしました。最初は誰かに読み聞かせてもらってから「絵本の世界」に慣れて行くのは、どこに国でも変わらないことかもしれません。

感謝感激！ 絵本を提供していただいた岩田温子様、中国訳をして頂いたわんりい中国語勉強会の皆様に感謝いたします。絵本に貼られた訳文は、色合わせ・文字のアレンジ・レイアウトが素晴らしく、ラオスで子ども図書館の計画をしている安井清子さんも、感嘆する仕上がりでした！



子ども大人も絵本を読む。街の3,4年生は、簡単な中国語は問題なく読める。大人は、すらすら読める人もいれば、子どもに教えてもらいながら読む人もいる。チベット人の中国語の程度は、様々である。



絵本を読んだお礼に家に招かれて(理塘)。石積みのでんに囲まれた中庭でジャガイモ、大根、白菜などを育てる。曲登では、見かけない。東チベットには、温室で野菜を作っている小学校もある。

【四川省カンゼチベット族自治州理塘県曲登郷ゲーサンメド小学校への寄贈絵本リスト】

(2005/9/9)

対訳・訳、貼り：わんりい中国語講座
絵本提供：岩田温子、他

▶担当：男性教員：ヨントォ／女性教員：ゲーサンラモ

- おっとおとしもの(哎呀东西丢了)/五味太郎/福音館書店
- コッコさんのおともだち(玲玲的朋友)/片山健/福音館書店
- マトリョーシカちゃん(小马德丽莎)/加古里子/(原作ヴェ・ヴィクトロフ)/福音館書店
- こぐまのむっく(小熊“木谷”)/小野かおる/福音館書店
- あたまのなか(头的里面)/高橋悠治作/柳生弦一郎絵/福音館書店
- のんびりおじさんとねこ(悠闲爷爷和一只猫)/西内みなみ 作/わかやましずこ え/福音館書店
- しぜんかいのなかのかたち むかいあわせ(自然界的形状形形色色)よつもとあきら/福音館書店
- とらのゆめ(老虎做的梦)/タイガー立石/福音館書店
- とんだトロップ(跳到了天上的吐鲁普)/小野かおる/福音館書店
- ゆびあそび(玩儿手指)/笠野裕一 さく/堤芳郎 え/福音館書店
- 恐竜王ティラノサウルスレック生まれる(霸王龙故事-“利古”出生了)/黒川みつひろ/童心社
- おかあさんはどこ(妈妈在哪儿)/フレデリック・ステール/トモ企画



絵を自慢する子供達

ラスパルマスからモンテゴベイ(ジャマイカ)までの大西洋は、ホノルルから横浜までの太平洋と同じく、次の寄港地まで一番長い船旅だ。地中海のように2~3日で次の寄港地に着いてしまうのと違って、一番落ちついて船内生活を楽しめる期間といえるかもしれない。しかし海が荒れて船酔いする人が多いところでもある。

午前零時にラスパルマスを出港した船は、大西洋を西へ進む。予想通り船は大揺れで、朝食後は、酔止め薬を

飲んでキャビンのベッドでごろごろしていた。昼頃、緊急船内放送が流れた。クルーの中に急病人がでたので、Uターンして、カナリア諸島のイエロ島まで引き返し、ヘリに移して病院へ搬送するという。放送を聞いて8階デッキに上がってみた。左舷に島を見ながら航行していたはずが、右舷に島が見える。バッグにぶら下げて携帯している磁石でも、船首が東を指している。毎朝ラジオ体操や太極拳をする屋上デッキは、立入禁止になっている。ピースボートに乗る前に読んだ西丸與一という人の本を思いだした。彼は船医として、ぱしふいっくびいなす(Pacific Venus)に乗船したときのことを、2冊の航海紀に書いている。ニューカレドニア

からグアムに向かう洋上での話だ。近くを航行する日本漁船に急病人がでて、その救助依頼を受けて、何時間も逆戻りして、その病人を自分達の船に移して、寄港地の病院へ搬送したという。それは思いがけないクルーズ中のできごとで、そんなことはめったにないことだと書いてあった。今回、私たちも、めったにないできごとで遭遇して、船酔いなどしばし忘れてしまった。右舷デッキは、船からヘリに急病人を移す瞬間を見ようと、“やじうま”でいっぱいになった。もちろん私もそのひとりだったが…。イエロ島を過ぎても、まだ救助のヘリは来なかった。

1時間くらいはデッキでうろうろしていたが、待ちくたびれて、キャビンにひきあげてしまった。その日は“安息

日”で、講座も自主企画もほとんど入っていない。夕食前の5時から、Tさんのキャビンで、寄港地で買い求めた伊、仏、西のワインを持ち寄り、“ワインパーティ”をやることになっていた。(再度書き添えておくと、キャビンでの飲食は原則として禁止されている。)何か準備することがあるかもしれないと、早目にTさんのキャビンに行くと、すでに準備はできていて、白ワインは携帯用の洗面器で冷やされ、チーズ、サラミ、ポテトチップス等のツマ

ミまで用意されている。予定の5時にはまだ大分間があったが、Tさんとふたりで一足早く栓を抜いて飲み始めてしまった。その間にもクルー向けの緊急放送が何回も流れていた。急病人をヘリに移すために、万全の準備が必要なのだろう。5時頃にヘリが来て、急病人を病院へ搬送していったそうだ。船もヘリも止まることなく速度をあわせて進みながら、急病人をヘリに吊り上げたようだ。その様子をデジカメに撮ったKさんが、パソコンの画面で見せてくれた。かなり大掛かりで、緊張する作業だったらしい。残念ながら、その場にはいなかったのだが…。しばらくして、「急病人は無事、病院に搬送されました。乗客の皆さんの協

力に感謝します。」という簡単な船内放送が流れたが、それ以外は何も公式には知らされなかった。その日の午前中、薬をもらうために診療室に行ったKさんは、クルーの診療時間でないにもかかわらず、顔色が非常に悪い男性クルーが、待合室にいたのを見たという。ヘリで運ばれたのは、その男性だろうということになった。それから数日間の船内は、その話題でいっぱいだった。病名は、腹膜炎だとか、心臓発作だとか、仕事中に胸部を強打したとか、いろいろな噂が飛び交った。そのあたりから、もしも船内で急死者がでたら、その遺体はどうなるのかという話になった。重石をつけて海に流し水葬にすることはないだろう。船内の焼却炉で火葬ということもないだろう。



ヘリコプターで救助



大西洋に沈む夕日

ピースボートのリピーターの話では、船内には霊安室があり、柩が3コ用意してあるという。冷凍にして日本まで連れて帰るとのことだ。第46回の旅では船内で2名亡くなったという。推測や噂で話はどんどん広がっていく。船旅の予備知識の無い私はすべて信じてしまいそうだ。前述の西丸ドクターの本には、船内で処置できないほど重篤な場合は(その本の中では、流産と末期がんと心臓発作と急性緑内障だったが)、次の寄港地まで急行し、病院に搬送したり、帰国を促したりした、ということが書いてあったが、船内で亡くなった人のことまでは言及していなかった。単調なはずの大西洋の船旅での、予期しなかったハプニングから、こんな話になってしまった。

あいかわらず大西洋は波が高く船は大揺れだ。逆戻りした遅れを取り戻さんと速度を上げるから、なおさら船が揺れるのか…? 4日続けて酔止め薬を服用。レセプションでくれるトラベルミンが効かない人に、自分が持っている酔止め薬を配って、善意のおしつけをしたのもこの頃だった。波は高いが良い天気が続いた。この旅の半分以上が過ぎた53日目の大西洋で、水平線に沈む美しい夕陽を、初めて見る事ができた。船内新聞に載っている日の入りの時刻に合わせて、ほとんど毎日デッキに出ていたが、水平線近くにはいつも雲があって、太陽は

その雲の中に入ってしまった。日没にデッキに集う顔見知りの人たちと、「きょうも残念ながらだめでしたね。」などと、言葉を交わしたりもした。ここにきてやっと、最後まできっちりと水平線に沈む夕陽を、2回も見る事ができた。太陽のてっぺんが水平線に隠れた瞬間、歓声が上がって拍手する人もいた。

元気な人は、寸暇を惜しんで企画や講座に参加し、船内生活を満喫している。私の場合はその逆で、ごく限られた2~3の講座に参加する以外は、シアターで映画を見るか、キャビンでごろごろしながらテレビを見る事が多くなった。「旅情」、「第三の男」、「慕情」、「エデンの東」、「駅馬車」、「荒野の決闘」などの懐かしい映画をシアターで見たのもこのときである。キャビンのテレビでは、「冬ソナ」を見ながら(聞きながら)昼寝をした。このドラマで流れる音楽は、心地よい眠りを誘う。でも大筋はわかったので、これで日本に帰っても、韓国ドラマの話に入っていけるぞと自信を持った。

夕食時の缶ビールだけではもの足りないと思ったときには、誰かのキャビンでの“宴会”や、居酒屋波へいでちょっと一杯という日が、3日に1度くらいの割合で続いた大西洋だった。

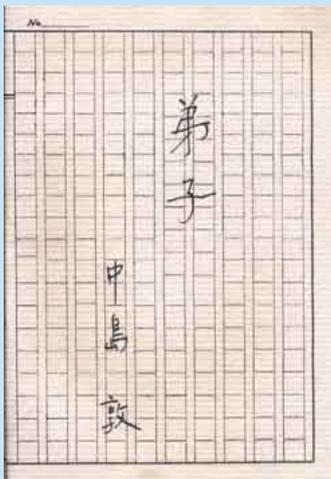
モンテゴベイには予定通りの入港だった。

中国を読む②⑥

中島敦「弟子」

中島敦の会・発行

県立神奈川近代文学館・所蔵



歴史上の人物が作家に憑依して、自分の人生を書かせることがあるという。ある女性作家がそう話していた。勿論、比喻に過ぎない。けれど、たとえば「弟子」という作品を読むと、子路という人物が中島敦に乗り移って書かせたものではないかと思う。そう信じさせる迫力と魅力が詰まった名作。

「弟子」は聖人・孔子を、弟子・子路の視点から生き生きと立体的に蘇らせた。人間臭く、感情のままに、己の美意識のままに、まっすぐに正直に生きる子路は、孔子への純粋な愛だけを拠所として、彼に従う。子路の愛する孔子は、スマートで明るく、希望を失わず、高貴で、しかし世俗的な成功には恵まれない。そして恵まれないがゆえに、逆に孔子の気品がますます輝きを増すというパラドック

スがおきる。汚濁した社会で、虐げられても馬鹿にされても、己の信じることを説く孔子を子路は全身全霊で守りぬきたいと誓う。政変乱れる社会と対比して、孔子たちの一団を真っ白に浮かび上がらせた中島敦の筆力は、読むたびに、私を涙させる。

今回、何度も読み、泣かされたこの作品を贅沢にも影印本で読んだ。実際に書かれた原稿用紙をまとめて本にしたものをたまたま神奈川県の書店で入手した。子路が中島敦に憑依して書かせたのではないかと思うのも、この本を目にしたから。というのも、子路が怒るときは筆跡が強く、子路が膝を打ち舞を踊るときは文字も楽しげで、子路が激するままに最期を迎えるとき、その字は飛び出さんばかりな躍動感を持つ。ラストで、子路の死を受け止める孔子を描写する文字は震え、小さくなって物語は閉じられる。

作家・中島敦も奥歯を噛み締める人生だった。あふれんばかりの知識を抱え、はちきれんばかりの創作意欲を胸にしながら、作品がようやく認められ始めた33歳で死んでいく。しかし、地位や名誉に恵まなかった彼等の足跡は、確かにそこに残っている。(真中智子)

旧暦九月九日は「重陽節」です。

古(いにしえ)の中国の人々は、天地万物は陰と陽に分類されていると考えていました。奇数は縁起の良い「陽の数字」とされ、中でも一番大きな陽の数字である「九」が重なる九月九日は、陽と陽が重なるので「重陽」と呼んでいました。

「九」は中国語の「久」と同じ音で、長久平安の意味があり、昔から人々に重視されていました。また、「重陽節」は「登高節」とも呼ばれています。その由来には、次のよう

な物語があります。

後漢の費長房は汝南の桓景と言う人に「九月九日、あなたの家に災いが起こります。赤い袋に茱萸の実を入れて、肘にかけ高いところに登って菊花の酒を飲み、災いを避けましょう」と言いました。

桓景は言われたとおりに家族と共に山に登り、夕に帰宅して見ると、家畜が皆死んでしまっていました。それ以来、人々は九月九日には茱萸を身につけ、高いところに登り、菊花酒を飲むという風習が始まったというのです。

北京からこんにちわ! —③

ういぐす
為楠 君代

※ 大家好!

北京は、日曜日(28日)から、蒸し暑い日が続いています。一雨あると確実に寒くなる(!)のだそうです。そして、その雨が、降る、降るといわれながら、なかなか降らないで、4日間も、暑い日が続いています。ひところの暑さと比べると随分楽なのでしょうが、一度涼しさを覚えた身には、この、名残の暑さが応えます。今日も結局降らないで終わりそうです。

ところで今日は、餃子のお話をします。先日、…と言っても3週間ほど前ですが、瀋陽の北京事務所の近くのレストランに連れて行っていただきました。瀋陽の人々が北京へ来ると必ず立ち寄りレストランだそうで、餃子が特に有名です。そこで、蒸餃子をはじめ頂きました。水餃子とは歯ざわりがちょっと違い、しこしこして、中には小籠包のように肉汁がたまっていて、とても美味しいものでした。この餃子は、普通のとは違って、粉をこねる時、熱湯でこねるのだそうです。そうしないと、蒸している間に、皮が破けてしまうのだそうです。

最近になって、近くのレストランで、またまた餃子を頂く機会がありました。そこは、特に有名と言うものではありませんが、餃子の注文が多いようで、客席からも見えるところに餃子を作るコーナーがあって、注文が入ると、コックさんが中身を調合して、皮を作る人、包む人のチームに渡します。それから生地を伸ばして、包んで、出来たものを奥の厨房へ持って行ってゆでて、客席へ持ってくるので、大変面白く、しばし見とれてしまいました。

そこで頂いたのは、西葫芦(シーフールー)の餃子でした。シーフールーは、辞書には、「かぼちゃの一種、ペポカボチャ」と出ていますが、見たところ、丁度白瓜のようですが、表面は白瓜ほどつやがありません。千切りにして餡にするのですが、出来上がりがとても柔らかで美味しいのです。餃子の餡はいろいろあるようですが、日本でなかなか食べられないのは、このシーフールーとホイシヤン(茴香)でしょうか。ホイシヤンは、漢方薬にもなるウイキョウの葉っぱです。ちょっと癖がありますが、これも美味しいものです。

今日で8月も終わりです。暑さに閉口して、涼しさを待っ

ていますが、あまり急に寒くなるのも、ちょっと心細くなります。時がゆっくり進んで、月餅が美味しくいただけるといういなアと思っています。

※ 大家好!

今年の中秋は、月が雲に隠れて、ちょっと寂しい思いをしましたが、月餅をいただき日本を偲びました。

この所、北京の秋はぐんぐん進んでいます。昨日、今日は、半そででは寒く感じるようになりました。これからは、一瀟千里と言う感じで寒くなるのではないのでしょうか。

先日、久しぶりで故宮に行きました。入場したのは3時半ごろで、途中珍宝館の方へ入って、そこから北のほうへ行ったので、途中で閉門の時間になりました。メインルートの北半分を見ていなかったのが、ちょっと行って見ようというので、人々が出て行く門を逆に歩きました。西の門から出ようとしたのですが、そこは工事中で、係りの人に、元来た道を戻るように追い立てられました。

中央の広場にはもう人がいなくなり、係りの人が、声を掛け合いながら無人になったのを確かめて門を閉め、鍵をかけました。係りの人に追われて、一緒に北へ歩いていると、途中の門からも係りの人が、観光客を追い立てながら出てきて、それぞれ門に鍵をかけていきます。もう少しで出口と言うところに、一人の人が立っていて、その人は、10センチ角位の紐の短いポツシェットのようなものを手にいっぱい下げていました。私たちを追い立ててきた係りの人も、そこまで来ると、手にした同じような袋をその人に渡して、帰っていききました。その袋には、鍵が入っているようで、立って待っていた人は、袋を受け取ると、中を改めてから、手に下げていたものに加えました。数を数えて、又待っています。まだ他の方から、門を閉めながら帰ってくる係りの人を待っているようです。

思うに、沢山ある門に、それぞれ鍵をかける担当者がいて、その人たちが、中に人がいなくなったのを確認して、担当の門を閉め、鍵を袋に入れて北の出口へ行くと、そこで元締めが、それぞれの鍵袋を受け取って、施錠と無人を確認できるような仕組みのようです。原始的ですが、なかなかいいシステムのように見えました。ちょっと面白い体験でした。

夕方、マイの家を訪ねた。薄暗くなりかけた小さな家に、小さなマイはぼつんと一人でいた。

「お母さんは?」「山の畑にトウモロコシを背負いに行った」「まだ帰ってこないんだね」マイはうなづいた。マイは乾いたトウモロコシを手にとると、粒をこそげとっては鶏にやった。鶏はにわかには活気づきコーッコッコッコとマイの周りを跳ね回る。暮れなずむ景色の中で、小さなマイが鶏にえさをやる姿・・・私は涙が出そうになってしまった。3年前とあまりに光景が似ていた。でも、3年前、それはマイではなく、マイの姉のツアイだったけれど。

3年前、武内太郎さんがテレビ取材、海外初仕事でやってきたのがゲオバトゥ村。モンの民話語りを題材としたその番組の主人公になったのが、ジャンザウさんという民話語りの上手なおじいさんと、ツー少年だった。ツーは13歳。夏休み中毎日、牛追いに行く貧しい少年。ツーはジャンザウ爺さんの家に民話を聞きに行くようになり、「牛追いのみなしご」が主人公となった民話を聞き覚えて、山の草原で他の子どもたちに語ってきかせた。・・・ツーの妹が、ツアイとマイだ。ツアイは、10歳くらいだったろうか。マイは3歳くらいだった。取材に行った山からの帰り、一人迷子になってしまった太郎さんを、村まで連れ帰ったのがツアイだった。太郎さんは、ツーには自分のかぶっていたナイキの野球帽を、ツアイには、「迷子を救ってくれたお礼に」と、チェック模様の傘を買ってあげた。ツアイは恥ずかしそうに受け取っていた。きっと生まれて初めてもらったプレゼントだったにちがいない。ツアイはその後も、ずっと太郎さんのことを「また来ないかなあ」と言っては、懐かしんでいた。

今年6月、2年ぶりに村を訪ねた私は、すぐさまツーとツアイに会いに行った。二人ともいなかった。兄ツーは、中学をやめ村を出て兵士になっている。「兵士になりたいわけじゃないんだよ。ぼくみたいに貧しい家の子が、外に出るにはそれしかない」と、ツーは前に言っていた。妹ツアイは、「こんな貧乏暮らしはたくさんよ」とお母さんとけんかして家出してしまったという。

お母さんは離婚してから、女手一つで家を守っている。がらんとした何もない小さな家。ツアイはよくひとりぼっちでポツンと家にいた。暗くなったら、火をおこ

すライターもない。火を借りに隣の家に行き、ようやく薪に火をつけご飯を炊く・・・その姿はけなげで、そして寂しかった。母も必死で畑仕事をして戻ってくる。確かにヒステリックになったり、小言がうるさかった。一人の肩にかかる重荷につい愚痴ってしまう母の気持ちもわかるし、母を手伝って家事や畑仕事をこなしているのに、愚痴を言われ、反抗期になって反抗して家を出てしまったツアイの気持ちもわかるような気がして、なんともやりきれなくてしかたない。

私は、もっと早く図書館活動が村に入っていたら、彼女を少しでも救えたんじゃないか?と思う。もちろん、彼女の貧乏暮らしは救えない。環境にうち勝つのは大変なことだし、何の役にも立たないかもしれない。でも、少しでも、現実とは違う、夢がある世界に出会え、ほんの少しの時間でも、目を輝かせてお話の世界に夢中になることができる・・・そんなことが、子どもたちの心に与えるものの力は大きいのではないかと思う。子どもたちが子どもたちなりに夢をみられる場所、心の世界を広げる場所・・・そんな空間と時間を作りたい。

お兄ちゃんとお姉ちゃんがいなくなってしまったツアイは、たった一人で留守の家を守り、鶏にエサをやっている。もうすぐ暮れおちる。家には明かりひとつない。ツアイはエサをテキパキとやり終わると、鶏をさっさと小屋に追い込む。子どもたちは、必死に、けなげに生きている。



なかなか本に触れる機会のないラオスの山の子どもたちにとって、「図書館」や「文庫」は馴染みのないものですが、これからの子どもたちが、本のお話の世界の楽しさを知ること、未知の、より広い世界への扉を開け、心の世界を広げていくことが出来る場所、自分たちの民族独自のお話に改めて出会っていくことで、自分たちのことを見つめていくことが出来る場所、として「山の子ども文庫」を作りたい。

ラオス 山の子ども文庫基金

<http://www.geocities.jp/pajhnumky>

遠い遠いアフリカを思うとき、いろいろな出来事と共に思い出すのはいつもそばにあったアフリカの音楽と踊りだ。今でも目をつぶって音楽をかけると、アフリカにタイムスリップしたような気になる。日本にも、多くではないがアフリカ出身のアーティストが来て、コンサートをすることがある。完成されたそのパフォーマンスは、“アフリカ”を感じるのに十分だ。そして彼らは、欧米のレコード会社に席を置きアフリカには住んでいないことが多い。アフリカ人にとって彼らは、憧れのセレブリティとして映っている。

ここでは、もっと身近にあるアフリカの歌と踊りの数々を紹介したい。

大きく言って3つに分けられると思う。ひとつは、どここの場所にも1つは絶対あるアフリカ風「ディスコ」で見られる音楽と踊りだ。ディスコといっても日本のそれとは全く違う。総合娯楽場とでも言えるだろうか、食堂、バー、喫茶店、そしてディスコがひとつの場所に収まっている。私の住んでいたナイロビから40kmのムロロンゴという地域にも5軒のディスコがあった。私はそのうちのひとつ「CAPITAL WAY (キャピタル・ウェイ)」というところに、昼夜を問わず通っていた。その店はナイロビへと続く幹線道路沿いにあり、規模的には中堅であるが、毎夜ライブがあり、常にクールなDJがいて、なによりも直送されてくる牛肉の新鮮さに定評があった。隣町が牛飼いで有名なマサイ族の町ということもあり、肉が新鮮でかつ安く食べられるのだ。

私は、朝仕事に出かける前ここに寄りよく朝食を取っていた。アツアツのミルクティーとそこで飼ってる鶏から毎朝生まれる卵を焼いてもらい、それをパンにのせてもらう。日本円にして40円。従業員の彼らは、珍しいアジア人の私にいろんな話を聞かせてくれる。「昨日お客さんに大物政治家の何々がきて、しかもガールフレンドとお忍びだったよ」とか、「早魃の影響で、肉の値段が値上がりしたよ。」「DJを変えたんだけど気付いていた?」「そろそろ雨季が来そうだね。」とかかわいもないおしゃべりだ。彼らは、ディスコで働く従業員であるが、ケニアの政治や経済にはすごく敏感だ。日本のことも良く知っている。毎朝、新聞ネタはここで仕入れていた。そして、ナイロビで新聞を買って確認する。

また、金曜日はメンバーズ・デイと呼ばれ家族で揃って過ごすのが一般的だ。当然、家族連れが多くなるのも

この曜日だ。5時頃から、そろそろと子供たちを連れて家族が集まってくる。そして焼肉を注文する。まず肉を選びにディスコの隅にある肉売り場へ、お父さんが直行する。牛肉0.5キロ200円位だ。牛一頭がさかさまにぶら下がっている。それを数キロ頼み、店員はそれをナイフでそぎ落とし、炭火でじっくりと小一時間丁寧に焼いてくれる。

その間、バーの店員が飲み物のオーダーを取りに来てくれる。ケニアでは、国産ビールのタスカ(=スワヒリ語で“象の牙”の意味)が良く飲まれる。一本100円くらい。そのほかに、ハイネケンやギネスといろいろと外国ビールも揃っている。飲みながら、DJのうまい選曲に誘われて、老若男女問わず、踊る。そして誰もが自分のスタイルで、楽しく踊っている。うまい下手なんて関係ないかのように。そこでの曲は、アメリカのヒットチャートをにぎわすヒット曲ではない。全部アフリカの音楽だ。西アフリカのリンガラ音楽あり、南アフリカの音楽あり、地元ケニアのスワヒリポップやラップ音楽ありと。アフリカのダンスに共通するのは、腰の振り方だ。誰もがリズムに合わせてセクシーに腰をふる。真似の出来ない私は、自分の出来る範囲で踊っていると、よくDJからかわられてマイクで「謙虚な美しさで踊るアジア代表!」とか言われて恥ずかしい思いをしたものだ。おかげでちょっとした逆の意味で有名人。「どうしたらそんなに謙虚に踊れるの?」と不思議がられる。

そして、夜もふけてくるとプロのダンサー、マジシャン、お笑い芸人やアクロバッターによるショーがある。どれも、レベルはすごく高い。それらを眺めつつ、肉が運ばれてくる。ケニアに牛肉は本当においしい。塊のまま焼かれた肉を小分けに切ってもらってお皿に乗せてくれる。塩を少しつけて食べる。カチュンバリという野菜サラダと一緒に食べると尚おいしい。自然な肉の味と硬さとも言おうか。そのまんまの味がする。私の中では、ナンバーワンの焼肉だ。

踊りつかれ、家路に着く頃には、大きな月が落ちこちそうなくらい近い。街灯もなく歩く家路は、真っ暗。月明かりで帰る。ディスコの中とは対照的なアフリカの夜の闇が広がっている。すぐ横にあるナイロビ国立公園と町を分けるフェンスの向こうには、野生動物の夜の狩りが行われているのだろうか? そしてスラム街を横目に歩く。ディスコの、貧困とはかけ離れた別世界が、嘘のよう

に思えてくる。

もうひとつは、日曜日の教会のミサで歌われる歌と踊りだ。ケニアはほとんどがキリスト教徒であるけれど、宗派によって歌や踊りに特徴がある。私は、日曜ごとにいろんな教会に潜入していた。(罰当たりですみません)カトリックの教会は、ほぼどこの教会に行っても同じで、伝統的な静かな賛美歌だ。踊ることはない。しかし、プロテスタントやアングリカンとなると教会ごとにまちまちで面白い。打楽器やギターの伴奏の下、踊り続けるといったものや、叫ぶように聖書を読み、踊るといったものもある。しかし、どこに行っても彼らの抜群の歌唱力とリズム感には感動する。アメリカに渡った奴隷となった人々が歌ったゴスペルの起源であるところの力強い声とリズム感のふるさとはここにはあるのだ。楽譜を持たない彼らが奏でるメロディーは、心に刻まれているものだ。透明で力強い、美しい声。太鼓の音と、重なり合うよう響く声。聞く者の胸を打つ。歌と踊りによって、日々の苦悩や迷いが癒されていく。体からずっと、何かが向けていくのを感じる。そんな音楽の持つ力を私はそこら中で感じていた。

最後は、それぞれの民族が持つ固有の歌と踊りだろう。ケニアには53の民族がいるがそれぞれの部族語で歌われる歌と踊りがある。私の聞く機会があったのは、キクユ族(ケニア最大部族)と有名なマサイ族だ。旦那がキクユ族の出身なので、実家に共に帰ったりすると歌と踊りで出迎えてくれたりする。私にはその歌の意味は分からない。しかし、その美しいメロディーとリズムは、故郷に戻った喜びを伝えてくれる。状況に合わせて選曲される歌は数千種類もある。語り継がれて、歌われてきたものなのだろう。親戚がナイロビの病院で亡くなった時、棺を積んだ車で一緒に村に帰ってきたことがあった。村に入るなり、彼女を迎える歌が始まった。その後彼女の死を悼む歌は、埋葬されるまで数十曲続いた。そして、アフリカの大地へ還っていく喜びの歌で最後は締めくくられた。

またマサイ族の歌と踊りは、アカペラでサバンナの草原で輪になって歌っているのを聴いたことがあった。素朴なメロディーが、自然と調和していて美しかった。人の声が楽器のような感じだ。声をもつ不思議な魅力を感じさせてくれる。

付け加えるとケニアでは、ラジオの音楽番組が充実している。英語やスワヒリ語、部族語でそれぞれに放送されている。それぞれに、一日中音楽を流している音楽番組が必ずある。私は、部屋では何をするときでもラジオ

をかけていた。すると、隣近所から苦情が聞こえてくる。「どうしてそんな小さい音で聞いているの？みんなで聞こうとは思わないの？自分勝手ね！」というものだ。日本で近所さんに迷惑にならないよう騒音を気にして生活してる現在と反対だ。なので、くれぐれもアフリカではラジオの音はみんなに聴こえるよう大きめに。ちなみに、私は、「KISS・100」というリクエスト方式で曲がかかるラジオ番組が大好きだった。アフリカ全土のさまざまな民族の曲が一緒にかかるからだ。

音楽と踊りは生活の一部であり、人々の暮らしと共にある。時には癒されたり、忘れさせてくれたり、楽しませてくれたり。音楽の持つパワーを感じる事が出来たのも私にはアフリカが初めてだった。踊る楽しみも初めて覚えた。そんな喜びと楽しみを伝えたくて、相模原でアフリカダンスパーティーを今までに2回ほど企画した。アフリカ人、日本人問わずいろんな国の方に来て頂いた。今回は12月に、クリスマスダンスパーティーを企画している。

【活動報告】

講演会

「あなたの知らないアフリカの事実」

'05年9月18日(日) まちだ中央公民館・視聴覚室
講師：ガスパレイ ミグィキルス 通訳：竹田悦子

講演会は、36席のまちだ中央公民館・視聴覚室は、予想をはるかに超えた満席となりました。

講師に立たれた、ケニア出身のガスパレイ ミグィキルスさんは、アフリカに対する偏見や無知を越えた相互理解の足がかりとして奥さんの竹田悦子さんとアフリカコネクションを設立し、アフリカの紹介活動を続けていらっしゃいますが、アフリカの抱える問題をアフリカ人自身の見地から、過去、現在、そして未来への展望をきちんと整理され、休憩なしの2時間に渡る、熱のこもったお話でした。

地球上の全ての民族の母が生まれたところであり、豊かな資源に恵まれ、かつては飢えを知らない一つの広大な大地であったアフリカが、現在、何故に50いくつもの国に分割され、飢餓と民族闘争に明け暮れる地域となるにいたったのか。

私にとってアフリカは遠く、現況を漏れ聞くのみで漠然と大変なところだ程度の認識しかありませんでした。考えてみれば、マスメディアでもアフリカ人自身の口でアフリカが語られるの聞いたことはありません。今回はその意味でも貴重な機会で、多数のご参加を頂いた一つの大きな理由だったかと思いました。

講演内容の要約を、何回かに分けて、竹田悦子さんに寄せて頂きます

(田井)

(第1回はアフリカの過去について14ページ)

講演会「あなたの知らないアフリカの事実—その過去・現在・未来から考える」

要約1 アフリカの過去

講師：ガスパレィ ミグィ キルス (ケニア出身) (アフリカンコネクション)

皆さんは、アフリカの問題というのを挙げられるでしょうか？もちろんいろいろ考えられると思いますが、やはり一番は「貧困問題」ではないでしょうか？もちろん、先進国にも貧困は存在します。しかしながら3秒に一人の割合で、病気、飢餓、貧困等で、毎日平均して7000人もの人がアフリカで亡くなっているという事実を聞くとどう思われるでしょうか？この絶対的な貧困は、アフリカ人だけのせいなのでしょうか？

今日(9月18日)は、先進国に住む皆さんの生活とこのアフリカの問題がどう関わっているかを、アフリカの過去、現在そして将来を見ていくことによりお話したいと思います。

また、今日は、北アフリカを除くサハラ砂漠以南の43カ国のアフリカ諸国のことについてお話しようと思います。

あまり知られていることではありませんが、実はアフリカの問題は、アフリカ人自身による原因ではありません。ですから、アフリカの問題は他に類を見ない特別な問題といえます。もともとは部族単位で長い間平和に暮らしてきたアフリカ人が、どうして突然銃をとり戦ったりするのでしょうか？なぜアフリカ大陸に散らばる兄弟・姉妹のアフリカ人たちと戦わなくてはいけないのでしょうか？アフリカの問題には、奴隷貿易と植民地支配によって象徴されるような、アフリカ以外の国々による、略奪と搾取と支配を歴史があります。

現在、アフリカには53カ国の国があり、アフリカ全土で約8億7千万人の人が住んでいます。世界の人口の10%を占めていることになります。全世界の大陸がアフリカ大陸から分かれたことから、アフリカ大陸は大陸のふるさとであり、最初の人類が誕生したということから人類の発祥の地でもあります。

1)アフリカの過去

昔、アフリカ大陸には現在見られるような国境線はなく、王様や、部族の長を中心とした部族単位がまとまって緩やかな統治がされていました。それぞれの部族は、独自の伝統と文化を持ち、また独自の問題を持ち、それぞれ独自の方法で解決してきました。アフリカ人は極めて平和な関係を保っていました。

しかしその平和は、アフリカを探検するようになったヨーロッパの白人たちによって犯されていきます。それは、奴隷貿易の誕生となり、植民地支配へと発展していききました。アフリカ人の特徴として、身体能力に優れているということがあります。白人たちは、あまり食べないで



Gate of No Return (西アフリカ/ベニン)、アフリカ人奴隷がここから旅立った

も長時間の重労働ができる能力を持つことに目をつけました。厳しい大地で生活してきた彼らの身体的優位性が、彼らを奴隷としての商品にしたのです。多くは、西アフリカの海岸から船に乗せられて、南アメリカのプランテーション農場へ輸出されていきました。彼らの旅立った門は「gate of no return」(=帰ってくることはない門)と呼ばれ、現存していますが、負の遺産として公開されることはあまりありません。

現在、世界各国にいる黒人たちは、この奴隷貿易で散らばっていったアフリカ人たちの子孫ということが言えると思います。特にアメリカにいる黒人たちは、その奴隷貿易時代に特に身体能力の優れたカップルを結婚させて子供を作らせていたという事実があります。遺伝子的に優れた身体能力のアフリカ人が増えたといえるかも知れません。

アフリカ探検家たちが持ち帰った情報を基に、戦後の1890年のベルリン会議の結果、ヨーロッパ列強は2カ国を除く全アフリカを植民地にしていきました。それは、今まで手付かずだったアフリカの豊富な地下資源、労働力、肥沃な大地を略奪するためのものでした。植民地とは、強制労働、土地の略奪、資源の略奪を意味し、逆らうと暴力、大量虐殺が待っていました。こうして、奴隷貿易と植民地支配はアフリカを搾取、支配し続けていきました。この事実は現在、世界でも認められているところですが、アフリカ諸国が独立した現在でも、これ以上の試練がアフリカを待っていました。

(要約：竹田悦子)

コスモスに強さ華やぎ賞ひけり

dà bō sī jú huā
大波斯菊花shēng xìng qiáng rèn mào lì huá
生性强韧貌丽华wú dāng xiào fǎng tā
吾当效仿她

季語：大波斯菊，秋。

菊科一年生草木植物，高1至2米，秋天开花，花茎6至8厘米，单本分瓣或重瓣，有白，有红，大红等色。

作者想从大波斯菊那里得到的，是其内心的坚强和外貌的美丽。

“わりりい”のおたより会員になりませんか？ 入会金なし 年会費：1500円

わりりい'は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることは、国や民族を超えた理解のきっかけになるのではないか」という趣旨で、市民レベルでの国際友好を目指して、1992年より活動している市民ボランティアの会です。これまで目的に添った講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を数多く開催してきました。

活動の様子は、年10回発行される会報‘わりりい’と‘わりりい’のHPでご覧いただければと存じます。

‘わりりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わりりい’の全ての活動に参加できます。おたより会員の年会費は、1500円で、会報‘わりりい’の郵送費と活動のサポート費に充てられます。

問合せ：わりりい'事務局（1Pに掲載）

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

「中国語で歌おう会」 会員募集中！

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう！



10月の講座 10月14日(金)

19:00～20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

fūqī shuāngshuāng bǎ jiā huán

●10月の練習曲：「夫妻双双把家還」

*安徽の(黄梅劇)主題歌 どなたでも歌えます。

- ◆11月18日：日本の歌「里の秋」(又見炊煙)
- ◆12月16日：10月の練習曲の復習と「平安夜」(聖夜)を歌います。

●指導：趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加(1500円)歓迎します。ご自由にご参加ください!!

なお、ご参加される方は録音機をお持ちください。

問合せは、‘わりりい’事務局へどうぞ

TEL/FAX：042-734-5100

ベトナム料理交流会から

〈エスニック味の簡単デザート「小豆のチェ」〉

作り置きもできるし、作りたての暖かいままでも美味しい、ココナッツミルク味のデザートです。オヤツや女性の来客にも喜ばれるでしょう。

【材料】

ココナッツミルク缶詰 1缶
小豆の缶詰 1缶
タピオカ 小粒 50g～100g
牛乳少々

【作り方】

- ①タピオカをたっぷりの水で、かき混ぜながら、透明になるまで茹でる。箆にあけて水でよく洗い流す。
- ②ココナッツミルクの缶詰めは、缶を開ける前によく振り、ボールにとって更に滑らかにする。

- ③小豆缶の中身を小鍋にあけ、ココナッツミルクと牛乳、茹でたタピオカを加えて一煮立ちさせる。甘みを好みで調整する。

*砂糖の加わらない小豆缶、或いは、自分で小豆を煮れば好みの甘さにすることができる。

- ◆小豆を使わないで、ココナッツミルク、バナナの輪切りスライスとタピオカを併せれば、「バナナチェ」である。



苗族の切り紙

万馬馬頭琴アンサンブル演奏会

馬頭琴奏者・チ・ブルグッド氏が指導の、万馬馬頭琴教室(東京・足利・佐倉の3教室)のメンバーを中心とする万馬馬頭琴アンサンブルが、今秋、演奏会を催します。

2005年10月15日(土) 13:30開場 14:00開演

於：日本橋社会教育会館ホール

103-0013 東京都中央区日本橋人形町1-1-17 03(3669)2102

東京メトロ日比谷線「人形町駅」A2番出口…徒歩3分／東京メトロ半蔵門線「水天宮前駅」8番出口…徒歩5分／都バス錦11 秋26 水天宮停…徒歩3分

入場料：500円

▶演出：チ・ブルグッド

▶演奏：万馬馬頭琴アンサンブル(馬頭琴)／西上和子(ピアノ)
内田充(ギター)／管野吉哉(パーカッション)

入場券の申し込みは、予約制で当日受付にて現金と引換えでお渡しする予定です。

お問合せ・予約は、manba@hotmail.co.jp まで。

第15回 中国文化の日(主催:財 日中友好会館)

■中国四川省の伝統演劇 — 川劇公演 参加無料

於：日中友好会館地下一階大ホール

'05年10月15日(土)、16日(日)…15:00開演

17日(月)…19:00～

*入場：事前予約者 30分前 当日 15分前(先着順)

*事前予約は既に締め切られました。当日、立見席のみ

■「中国民間年画展」 — 民衆の夢と願い

於：日中友好会館美術館 入場無料

鮮やかな色彩とユーモラスな絵柄で知られる、中国の民間版画による年画本展では、中国各地から集めた郷土色豊かな年画を約50点展示と、年画刷りに使用される版木や用具を展示します。

'05年10月1日(土)～10月23日(日)

10:00～17:00 (10月17日のみ21:00まで)

■年画の制作実演

於：日中友好会館美術館

'05年9月30日(金)、10月1日(土)、3日(月)、4日(火)

中国の代表的な年画産地・朱仙鎮より当地随一の年画作家、姚敬堂と張廷旭による刷りと彫りの卓越した技を披露する。

全ての問合せと申込み：(財)日中友好会館 文化部
東京都文京区後楽1-5-3 電話03-3815-5085

馬頭琴演奏会 心の軌跡



'05年11月14日(月) 19:00開演(18:40開場)

於：ルーテル市ヶ谷センターホール

JR市ヶ谷駅徒歩/都営地下鉄新宿線A1出口…徒歩7分
東京メトロ有楽町線/南北線 市ヶ谷駅…徒歩2分

▶馬頭琴：大内雅彦 ▶琴：オチルホイグ・ムンクトグトホ
(モンゴル国立馬頭琴交響楽団首席奏者)

申込み&問合せ：03-3488-1294

batoukin@uranus.dti.ne.jp

古箏幻想

— 晴虹 来日15周年記念リサイタル —

～恩師 王昌元大師を迎えて～

友情出演：伍芳

2005年10月10日 14:00開演(13:30開場)

於：横浜みなとみらい はまぎんホール ヴィアマーレ

(JR・横浜市営地下鉄 桜木町下車…
動く歩道利用5分 / みなとみらい
線 みなとみらい駅下車「クイーンズ
スクエア連絡口又ははやき通り口よ
り7分)

3000円 全席自由

申込み&問合せ：
TEL/FAX 042-379-6332

zui-kou@s3.dion.ne.jp



▶▶▶ お願い ◀◀◀

1Pで紹介しましたように、11月初旬、夢広場2005祭と関連事業の写真展が11月1日から5日に開催されます。写真展では、展示枚数は少なくとも70点を予定しており、納得いただける充実した内容の写真展になるかと存じます。

夢広場実行委員会の役割分担で、写真展は、主として'わんりい'が担当いたします。本祭/11月6日(日)と写真展飾り付け/10月31日(月)のほか、写真展会期間の受付当番など会員の皆様のご協力をいただけますようお願いいたします。

写真展をご覧にいらっしゃるついでに、短時間でも会場受付などでご協力頂ければ幸甚です。



第8回 町田発国際ボランティア祭 夢広場2005 会場地図